

## 第4学年 学校創立 50 周年プロジェクト 4 年 2 組歴史探てい団 ～下和泉小学校の歴史を伝えよう

【横浜市立下和泉小学校 岸 孝子】

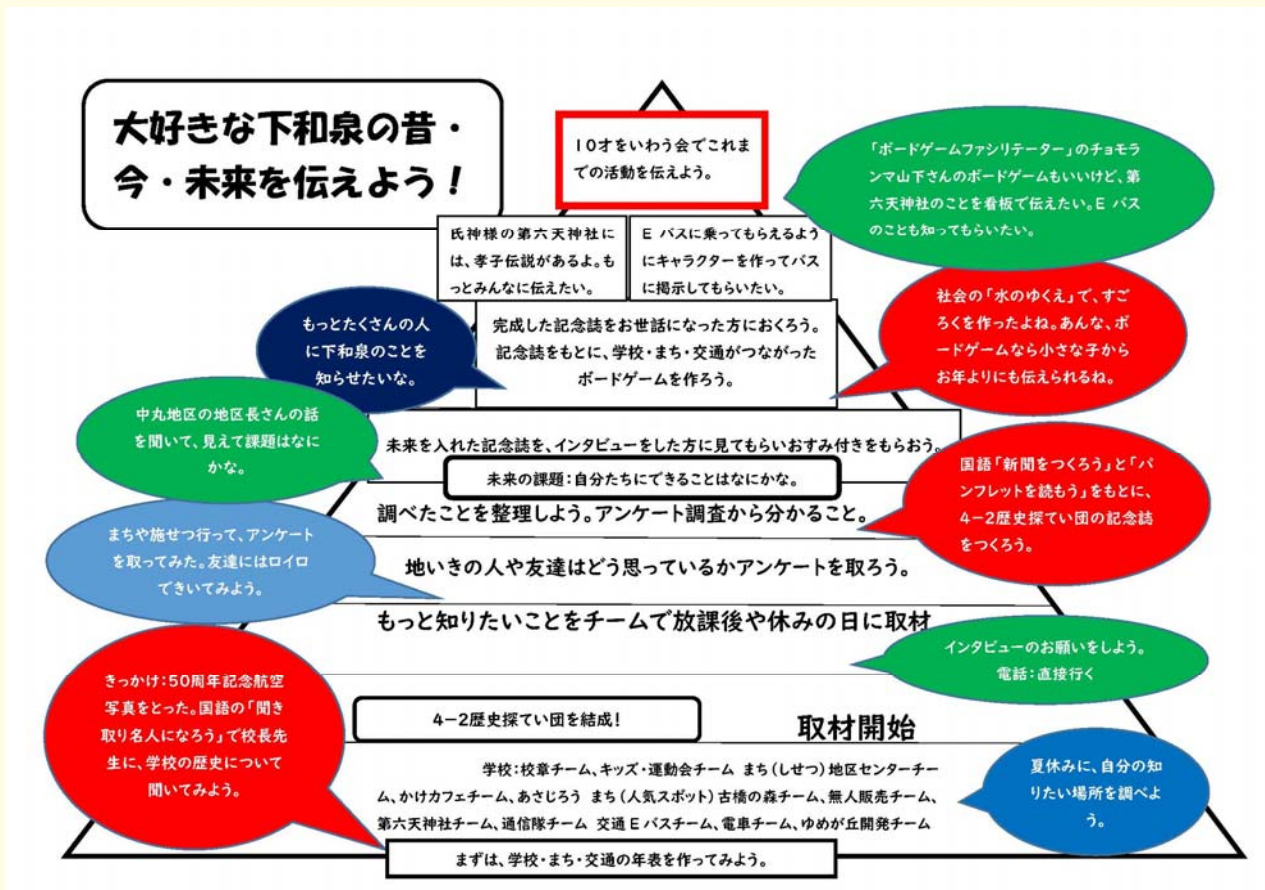
### 取組みのねらい

50周年に至る下和泉小学校の歴史を支えてきてくださった地域の方や本校卒業生の保護者の方とのふれあいを通して、自分の「ふるさと」への思いをもち、その中で自分たちができることを考えることができるようにしたい。

### 活動のきっかけ

五十周年を記念した航空写真の撮影を通して、学校が50歳を迎えることを実感し、もっと知りたいという気持ちになった。そして、国語の授業で、校長先生から下和泉小学の歴史について伺い、まとめる学習をした。その中からもっと知りたいと感じた、学校のこと、まちのこと、まちの施設のことを、4年2組歴史たんてい団を結成して調べることにした。

### 活動の内容のピラミッド図



学校のこと、まちの施設のこと、まちのこと、交通のことを調べる13チームの発表から、更に課題を見つけ学習を深めたいという「まちを守る第六天神社のことをもっとしてもらいたい」「地域のコミュニティーバスEバスに乗ってもらいたい。」2つのテーマに絞った。

交通環境学習の例として<Eバスの実践>

Eバスチームは下和泉住宅地区の細い道を走るEバスに興味をもち、どんなバスなのだろうと調べていった。調べていくと、このバスを下和泉住宅地区に通すために住民の人たちが力を合わせて天台観光に交渉し、実現したことを知った。そしてバスを利用する人にインタビューして課題を見つけたり、全校にEバスを知っているかアンケートを取ったりしてEバスの認知度を調べた。すると、利用している人は便利だけどもっと本数があると便利と感じている反面、路線が通っていない場所の人は、Eバスすら知られていないことが分かった。

そこで、

- ・Eバスをもっとたくさんの人に利用してほしいから、路線を増やしてほしい。
- ・Eバスの本数を増やしてほしい。
- ・Eバスのポスターを作ってみんなに知ってもらいたい。

など、課題解決の方法を考えた。そして、この思いを伝えるために、横浜市交通局の荒川さんに、子ども達がアポイントをとり、荒川さんと天台観光株式会社の松尾さん、森さんに自分たちの考えを伝えるプレゼンテーションをした。プレゼンテーションでは、自分たちが調べたデータに基づいて必要性を伝えた。荒川さん、松尾さん、森さんも、横浜市交通局としての立場、運行会社としての立場でしっかりと子ども達に向き合って実現させるための課題について話してくれた。

- ① 現在運行している、神奈川中央交通の路線との兼ね合い。
- ② ルートを広げるためには、そこに住む住民多数の賛成がないとできない。現在、3年たっても実現できない地域もある。
- ③ 運行するための燃料費。(高騰している)
- ④ 人手不足。(運転する人を増やさないといけない)
- ⑤ バスを1台増やすお金がない。
- ⑥ 1日の乗車数がそれほど多くない。



この6点を踏まえて、路線を広げること、本数を増やすことは難しいということに至った。

そこで子ども達は自分たちに何ができるか、大人たちといろいろ考えた。そして出てきた案が、

- ・Eバスのキャラクターをつくりみんなに知ってもらうこと。
- ・Eバスのポスターを作り、バスの中に掲示してもらう。
- ・クラスの中にも乗ったことがない人がいたので、Eバスに乗ってEバスツアーをすること。

これなら、実現可能だということで、早速準備を始めた。Eバスツアーに関しては、天台交通さんが特別に予備車を出してくれ、子ども達全員が1台に乗れるよう配慮してくれた。Eバスのキャラクターは、クラスみんなが描いてきた中から3点選び、その中からキャラクターを1つ天台交通さんに選んでもらうことにした。

キャラクターに選ばれなかったEバスのマスコットも、EバスをPRするポスターに入れて作り、ポスターを仕上げた。そしてEバスツアーは、クラス全員でルートを考えて2月1日に決行した。



ツアーに行く前に E バスをこの地域で運航できるようにした一人の当時自治会長をしていた佐久間さんに学校へ来ていただき当時のお話をしていただいた。佐久間さんは、Eバスは利用者が事前に登録し会費を払う方法だったが、路線化により会員登録が不要となり、誰でも乗車可能にすることができるようになったこと、最初は前例がないため苦労したけど、どうしても走らせたいという思いで天台観光に相談し実現したことなど、お話を聞くことができた。

これらの活動を通して、このまちの人たちやこのまちにかかわる人たちが下和泉を大切にしていることを実感し、自分たちもこのまちのことがもっと好きになった。そして、第六天神社の看板を作り、劇や踊りで伝えたり、E バスのことを知ってもらえるようキャラクターを作ったりして行動にうつすことができた。モビリティ・マネジメント教育のお陰でダイナミックな活動を行うことができた。